見てきた中国の植林事業

村田　嘉明

昨年８月、国際交流委員会主催の中国東北部および内モンゴル自治区訪問の旅行団に参加し、日中緑化基金（いわゆる小渕基金）から当協会が助成を受け実施している植林事業の現地「記念碑除幕式」に出席した。

チチハル空港から北へ60㎞の黒竜江省富裕県がその舞台。国家林業局、黒竜江省林業庁、斉斉哈爾市林業局の人々も参列して「記念碑除幕式」が行われた。横２・５m、奥行60㎝の赤御影石の台座の上に白色の記念碑（横１m、縦60㎝）。赤字で「富裕県中日友好・防風固砂模範林」と書かれ、台座には「２０１０年８月18日　国際善隣協会」と刻まれている。

植林現場は松花江の支流、嫩江沿いの元農地で、植林期間３年、面積２１８㌶、植林本数36万本、樹種は障子松で、育つと堂々たる松林になる。目的は松の植林により防砂モデル林を建設し、嫩江東岸を砂嵐から守ることである。現地は富裕県の中心部からクルマで30分、周囲は農地と林、土地は整地された平坦地である。チチハル市からの道路沿いに見た風景は一面の畑（湿地帯）であった。

われわれが植林する場所は、すでに畝の状態に整備され、軍手とスコップ等も用意されていた。準備されていた苗木（約50㎝）を「畝」に等間隔に植付けた。苗木の状態も良好で、たくましい成長が期待される。現地の人の話によると１年で20～30㎝も成長するという話であった。

私の見た限りでは内モンゴルのように砂漠化する危険性は少ないと感じた。それは松花江の支流「嫩江沿い」であるため、ある程度の水源が確保されているからである。

嫩江はロシアとの国境である黒竜江の中国側の最大の支流で、流域面積は20万平方㎞をこえる。その流域でさかんに植林がおこなわれている。とはいえ現地の年間降水量は４２０㎜と少なく、雨期と乾期の差が大きい。冬期の積雪は10㎝位で凍ってしまう。現地周辺は湿地帯が多く、ラムサール条約により湿原の利用・開発は規制されている。富裕県は牧畜業が主な産業だが、放牧でなく、飼料作物とそのサイレージ飼料によっている。

中国では、国土の砂漠化が問題になっている。人口の増加で食料の需要が増し、農地が拡大し、森林が伐採され、また牧草も根こそぎ食べつくされ、砂漠化が進んでいる。その結果、遊牧民や家畜は定住し、畜舎での飼育をすることになっている。

砂漠を可能な限り拡げない努力と平行して、砂漠の「新しい使い道」も考えられている。たとえばモンゴルのゴビ砂漠での風力発電や「太陽光発電」計画である。

昨年の中国旅行後、常任委員会の「国際交流委員会」に入会した。この委員会の植林事業としては、①北京民間友誼林②西安市臨潼区友好林③富裕県植林の３プロジェクトを遂行している。来年は甘粛省南部四川省境「成県」「康県」で桑栽培プロジェクトを予定している。